

【登場人物】

男  
老婆  
学生

— 0 —

初冬。

静まり返った民家の居間。

舞台中央にコタツ、その上に目覚まし時計、周りに座布団が二つ。

その他にタンス、棚、電話、座布団の山など。

床に物が雑然と広がっている。

舞台の前方には廊下が横一線に広がっている。上手は玄関、下手はトイレ、

老婆の部屋に繋がっている。

さらに前方には縁側があり、外に通じている。

正面奥には台所がある。

男が縁側に現れる。よれよれのジャンパーに薄汚れたジーンパンの出で立ち

が存在の胡散臭さを実際立たせている。

中を窺い、音を立てないように注意して入る。

誰もいないことを確認して、早速物色を開始。

ぎこちない手付きから素人であることが分かる。

時折コタツがモゾモゾと動く。

しかし男は気づいていない。

男、棚からチャックのついた小物入れを取る。

開けてみると、そこには印鑑。

印鑑を中に戻し、ポケットへ。

その時コタツの上の目覚ましが発鳴る。

男、驚いた拍子に棚にあっただけん玉を足に落とす。

足を抱えて飛び跳ねながら、目覚ましを止めに行く男。

コタツから手が出てくる。

男、目覚まし時計を持って驚き飛び退く。

まもなく老婆がコタツから顔を出し、男を見る。

老婆 (嬉しそうに) おお……お帰り。

男、逃げ出そうとする。

老婆、すかさず男の腕を掴む。

老婆 久しぶり。  
男 ……？

二人、見つめ合う。

—1—

三十分後。

何かを探している男と老婆。

男 ッたくどこにやったんだよ。

老婆 悪いね、わざわざ来てくれたつてのに。

男 謝る暇あつたら探せよ、ちゃんと。無かつたら困るだろ。

老婆 (通帳を手に取り)あつた。

男 おッ。

老婆 ほら、第一勸銀。

男 そんな銀行、もうねえよ。

老婆 え、ないの？

男 ないよ、もう。

老婆 (通帳を開き)……五二〇万。

男 え……(老婆から通帳を取り上げる)

老婆 (金額を指差し)ほら。

男 何だよ。

老婆 どうしたの。

男 五二〇万引き出して残り八十二円。

老婆 じゃあ今は八十二円……。

男 びっくりさせんなよ、全く。

老婆 何に使ったんだらうねえ……。

男 知らねえよ……あ、これ、どこにあつたの。

老婆 タンスの中だけど、

男 タンスか……

男、タンスの方へ。

老婆 ああ、一番上の段ね。

男、タンスの一番上の段の中身を床にぶちまける。

老婆 あーあ、そんなに散らかして……

男 何言ってんだよ、(床に落ちている様々を示しながら)タオル靴下紙袋、パンツ鼻紙  
食べ残し、散らかしてんのはどっちだ。

老婆 でもあたしは何週間もかかってこれだけど、お前は一瞬でこうだろ？

男 けど俺は、

老婆 (遮って)通帳見つけるためにやってるのであって……

男 分かってんじやねえか。

老婆 ふふふ。

男 だったら(散らかしていることにはならないだろ)、

老婆 (遮って)でもやり方が大胆というか、手荒というか……ダンス、空き巣に入られた

みたいね。

男 はあ？

老婆 ハハハ……何、その顔……

男 大丈夫、ちゃんと片付けるよ。

老婆 そう言って片付けないのがお前でしょ。

男 (床にぶちまけたものを物色しながら)まさか全財産八十二円ってことないだろ……

きつとどこかに……

老婆 似るんだね、似なくていいのに。

老婆、床に落ちている写真を手に取る。

老婆 (写真と男を見比べ)痩せたんじゃない、随分。

男 (写真を見る)いつの写真だよ……

老婆 え、これは……？ (老眼鏡をかけ、写真の日付を確認しようとする)

男 いいよ(見なくて)。

老婆 何で。

男 思い出したくないよ、こんな豚みたいに太ってる頃なんて。

男、写真を裏返してテーブルの上に置き、物色を再開する。

老婆 可愛いじゃない、金太郎みたいで。

男 ……

老婆 お前稲荷神社の相撲大会で優勝したことあったよね。

男 ああ……

老婆 中学生相手に最後は上手投げで勝ってさあ。

男 よく覚えてるな。

老婆 忘れるわけ無いじゃない、運動会じゃいつもビリッケツだったお前が初めて一等

賞になったんだもの。

男 ……

老婆 思わず土俵あがって抱きしめたら、お前家帰ってから怒ってねえ、二日くらい口利  
いてくれなくて……

男 (通帳がない……)  
老婆 あら、残念。  
男 残念じゃねえだろ。  
老婆 あ、そうか……  
男 ホントに覚えてないわけ？  
老婆 いや、あるよ。  
男 あるってのは何回も聞いたよ。  
老婆 ……  
男 何で相撲大会のことはそんな詳しく思い出せるのに……  
老婆 そんなこと言ったって……  
男 年金は？  
老婆 年金？  
男 年金の口座。  
老婆 ああ、その橋渡ったとこね。  
男 ……  
老婆 あったでしよ、郵便局。  
男 郵便局か……  
老婆 あそこ移ったら随分可愛くなっちゃって、一つしかないんだよ、窓口。  
男 自分で取りに行ってたんだ。  
老婆 行ってくれるの？  
男 行っていないの、今月？  
老婆 行ったよ、先週。  
男 じゃあ郵便局の通帳は思い出せるな。  
老婆 それがさあ……  
男 取りに行ったんだろ、先週。  
老婆 (無視して) 潰されるんだよ、ついに。  
男 ……？  
老婆 民営化でさ。  
男 ああ……  
老婆 始まった時は潰れませんが、名前が変わるだけですって話だったから、国もさすがに  
男 へえ。  
老婆 採算が取れなくなったとか言ってる。そんなの分かりきってたことじゃないねえ？  
男 それより……  
老婆 街中のおつきいとこ行かなきやなんないんだよ、これから。これも新しい未来のた  
めだとか言ってるけど、明日をも知れぬ後期高齢者のこともちつとは考えて欲しい  
よ。  
男 そうだよ。  
老婆 (同意と思い) ねえ。  
男 今を生きなくちや。

老婆 え？  
男 (遮って)通帳は？  
老婆 だから通帳あつても街中まで……  
男 無かったらどうにもならねえだろ。  
老婆 ……。  
男 思い出せるだろ、先週のことだし。  
老婆 んー……  
男 はい、年金を受け取って、郵便局を出ました。  
老婆 出た……  
男 この時通帳は？  
老婆 あつたと思うけど。  
男 怪しいな。  
老婆 忘れたら届けてくれるし。  
男 あ、そうか。じゃあ出て、橋を渡って、  
老婆 ちよつと待って。  
男 何。  
老婆 その前に、川眺めてき。  
男 ……じゃあ川眺めて、  
老婆 すごい、鮭の帰省ラッシュ、ありや乗車率百二十パーセントってとこだね。それ見て、うちの鮭も帰ってこないかななんて思ってたんだけど、そしたらホントに帰ってきて……  
男 どうでもいい、そんなことは。  
老婆 どうでもいいとは何だよ。あれはきつと(何かのお告げだったんだよ)、  
男 (無視して)眺めたあととは？  
老婆 ……帰ったよ、家に。  
男 よし、家にはあるわけだな。  
老婆 分かったとここで一休みしようか。(立ちあがる)  
男 何だよ。  
老婆 先は長いよ、印鑑もあるし。  
男 ああ、印鑑なあ……(おもむろにポケットにしまつてある印鑑を確認する)  
老婆 どこやったんだか……  
男 見つかつてもいいよな、一つくらい。  
老婆 いや一つしかないよ。  
男 え？  
老婆 お前でしょ、まとめたの。何個もあると分かんなくなるだろとか言つて。  
男 あの、チャックついたやつ？  
老婆 そうそう。  
男 ああ……  
老婆 あれ、車の時だったつけ？  
男 ん？

老婆 それともマンション？ どっちにしろ買って欲しいって頼みに来た時だったと思うけど。

男 ……車だな。

老婆 あ、やっぱり車の時か……今日車で来たの？

男 いや、今車検に出してて……

老婆 そうなんだ……まあそれじゃなくても大変だしね、東京からじゃ。十時間以上掛かるでしょう？

男 そうそう、高速代も馬鹿にならないし。

老婆 なるほどね。

男 ……

老婆 あれ結構大きいよね、写真で見ただと。五人くらい入る？

男 まあ。

老婆 じゃあゆったりね、家族で出かける分には。

男 うん。

老婆 あたしも乗れるじゃない。

男 え？

老婆 いや乗ることは無いだろうけど……二人分空いてるでしょ？

男 ……

老婆 さ、一休みしようか。

男 何でだよ。

老婆 腹が減っては戦は出来ぬ……(立ち上がる)

男 いいよ、別に。

老婆 竹屋の最中でも？

男 要らない、要らない。それより(思い出すのに専念しろよ)……

老婆 要らない！？

男 ……？

老婆 どうしちゃったの？

男 いや、だって今は……

老婆 竹屋の最中だよ。

男 まあ好きだけど、

老婆 お前サンタにも頼んだじゃない。

男 ……

老婆 食べるよね？

男 じゃあ……

老婆 はいよ。(歌う)パリッと軽やか心も弾む、竹屋の最中あ……

老婆、台所へ。

老婆 (声)ちようど貰ってさ、こないだ。

男 へえ……さっきの続きだけど、家帰ってきて……

老婆 (声) そんな急がなくてもいいじゃない。

男 何言ってるんだよ、早く見つけなさいと。

老婆 (声) そうは言ったって、一刻を争うわけじゃないだろ。

男 そんなのんびりしてられないんだよ。

老婆 (声) え、泊まるよね？

男 まさか。帰るよ、見つけたら。

老婆 ……

男 いや出張のついでにちよつと寄っただけでさ、帰らなきゃいけないんだよ、今日中に……明日会議もあるから、今夜中にその資料まとめなきゃならなくて……

老婆 (声) 仕事ねえ……

男 (自分の服装を気にして) あっ、いや、その……実家いる時まで仕事引きずってる感じもどうかと思ってる……着替えたんだよ、駅のトイレで……

老婆 (声) ゴマ？ 栗？ あずき？

男 ……あずき。

老婆 (声) あずき？ ……好きだね、相変わらず。

少しの間

落ち着かない様子の男。

老婆、最中が乗った皿を持って、戻ってくる。

老婆 どうぞ。(コタツに置く)

男 家着いて、まず何した？

老婆 ……

老婆、床に落ちているけん玉を手に取り、

老婆 これ、お前んだよね。

男 話を逸らすな。

老婆 いいだろ、まだ……(けん玉の先端で男の足を突く)

男 良くないのっ。(老婆からけん玉を取り上げ、コタツに置く)

老婆 これも良くないよ。(男の靴下の穴をけん玉の先で突く)

男 あ？

老婆 穴。

男 (見て) ああ……

老婆 確かどつかに……(探そうとする)

男 いいってば。

老婆 みつともないでしょ、穴あき靴下。

男 後、後。

老婆 そう言っていると忘れるし……

男 (遮って) 通帳。

老婆 ……

男 思いだして。玄関に入ったぞお……

老婆 玄関から入ってないかもしれないし。

男 え、玄関じゃなかったら……？

老婆 縁側のこともあるんだよ、気分によって。

男 ……

老婆 元気の玄関、えんえん縁側。

男 えんえん？

老婆 (泣く真似をして)えんえん。

男 ああ……

老婆 食べなよ、どんどん。

男 うん。で、あの日は玄関？ 縁側？

老婆 今は縁側……

男 今じゃなくて……

老婆 駄目だ、駄目だ。

男 おい、

老婆 もう見つからないって。

男 簡単に諦めんなよ。

老婆 (散らかった室内を見て)だってこんなに探したんだよ。

男 まだ望みはあるさ、ダンスだってまだ真ん中と下は……

老婆 見たよ、あたしが。

男 もう一度見てみないと……

老婆 まだ散らかすわけ？

男 上には第一勧銀がいたんだぞ……(中段もぶちまける)

老婆 もう好きにすれば。(立ち上がる)

男 どこ行くんだよ。

老婆 おしっこ。

老婆、トイレへ向かう。途中縁側にある靴に気づき、

老婆 あれ、これ……？

男 あ……

老婆 お前も縁側の気分？

男 鍵忘れてさ……

老婆 開いてただろ、玄関も。

男 いや、電気もついてないし、てっきりいないのかと……

老婆 いたでしょ、ちゃんと。

男 誰が思うんだよ、あんなところいるなんて。

老婆 ここ外から見えるでしょ。

男 (外を見て)……よく見えるな……

老婆 顔出して寝てたら間違われてさ、死んでんだと。

男 ああ……

老婆 余計な心配掛けたくないし……持ってくよ、玄関。(靴を取ろうとする)

男 いいよ、自分でやるし。それより、いいのか、トイレ。

老婆 ああ、そうだ、そうだ。じゃあよろしく。

老婆、トイレへ。

男、それを見て、

男 畜生、どこにやったんだ……

男、さつきにも増して探し方が手荒。

しかし肝心の通帳は見つからない。

コタツの最中を食べ始める。

まもなく口の動きが止まる。歯が痛い模様。

痛いところを避けて食べようとするので、おのずと不自然な食べ方になる。

その時電話が鳴る。

男、最中を口に咥え、慌てて電話線を抜く。

そしてガラス戸から逃げ出そうとする。

そこに老婆が戻ってくる。

老婆 どうしたの。

男 あ……(最中を食べる)

老婆 今電話来なかった？

男 ……(食べ終えて)いや。

老婆 あれえ……？

男 (テーブルの上のモナカを示し)食べなよ、母さんも。

老婆 え？

男 ん、最中。

老婆 よしてよ、我慢してんだから。

男 何、いい年してダイエット？

老婆 ……？

男、残りの最中を口に押し込むと、縁側の靴を取る。

老婆 あ、あたしのもよろしく。

男、黙って老婆の靴も取り、玄関へ。

老婆 (電話を見て)おかしいなあ……

老婆、濡れた手をズボンで拭う。  
その時、ポケットに何かを感じる。出してみると、それは正しく郵便局の通帳。

男 (声)元気の玄関……

男が戻ってくるので、老婆は通帳をポケットに戻す。

男 (戻ってきて)えんえん縁側……

男、縁側の方向から部屋を眺め、何やら考える。

老婆 頑張るね。

男 人ごとかよ……

男、諦めて部屋に入って物色の続き。  
老婆、コタツのけん玉を手に取り、

老婆 (「もしかめ」の替え歌)もしもし何処、通帳よお、我が家の中でお前ほどお、失くして困る物はないー、ダンスの中にはありませんー。(※最後まで続くことが望ましいが、もし途中で失敗しても、素早く誤魔化し、成功を装う)

男 おい……

老婆 やった、出来たよ。

男 やったじゃねえよ、早く言えよ、そういうことは。

老婆 ごめんね、忘れてて。

男 何、無いの、ここには。

老婆 無い、無い。

男 何だよ……

老婆 (けん玉を示し)よくやってたよね。

男 あ？ 忘れたよ、そんなの……

老婆 (またやる)ダンスの中には……

男 (老婆からけん玉を取り上げ)いい加減にしろよ、見つける気あんのか、ホントに。

老婆 そんな大きい声出さないの。

男 ……(外を気にする)

老婆 血圧上がるよ。

男 (声を潜めて)どうすんだよ、これから。

老婆 大丈夫だよ、お前もいるし。

男 だから帰るって、

老婆 (すかさず)見つかったらね。お茶入れてくるよ。

老婆、けん玉を床に投げ出し、台所へ。  
男、散乱した物を見て、

男 ああつ汚ねえなあ。(老婆に)ゴミ袋ある？

老婆 (声)あるよお。

男 この辺片付けるから、二、三枚……

老婆 (声)ほいよつと……

台所から束になったゴミ袋が投げ出される。

男 二、三枚って言ったろ。

老婆 (声)いいの、いいの、どんどん使って。

男 ……

男、室内に散乱した物を次々とゴミ袋の中へ入れていく。

その中にはさきほどテーブルの上に置いた写真も含まれている。

かなりのハイペースで進んでいくが、途中不燃ゴミに行き当たり、やや考えて袋を分ける。

老婆、マグカップと湯飲みをお盆に載せて運んでくる。

老婆 おお、片付いたじゃない……

老婆、片付いた室内に気を取られ、けん玉に一直線。

男、ぎりぎりのところでそれに気づき、

男 危ないつ……

男、左手にけん玉、右手にお盆。妙な体勢になってしまい、かなり苦しそう。

老婆 え？

男 これ……(お盆を受け取るように促す)

老婆 (けん玉に気づき)ああ、これか……(けん玉を受け取る)

男 (バランスを崩し)あつ……おつ……(何とかお盆をコタツに置き)こつちだろ、普通。

老婆 ありがとう。自分で置いたのね、何やってんだか……(けん玉をコタツに置く)

男 気をつけるよ、全く……はい。(湯飲みを差し出す)

老婆 ん？

男 どうしたの、はい。

老婆 そつちでしょ。

男 え。

老婆 あたしのはマグカップ(マグカップを手取る)……いつだったっけ。  
男 ……  
老婆 これ、買ってくれたの。  
男 ああ、俺が買ってやったのか。  
老婆 車のお返しにね。取っ手が付いてる方がいいだろうって。  
男 そうだ、そうだ。……いや随分前だったからさ。  
老婆 そんな昔でもないよ。  
男 そうかなあ。  
老婆 ちよつと、ボケるには早すぎるんじゃない。  
男 ハハハ……  
老婆 (不燃ゴミの袋を見て)こっちが捨てるの？  
男 それ燃えないの、隣が燃えるの……  
老婆 え、じゃあどっちも捨てるわけ？  
男 (可燃ゴミの袋からフリーペーパーを取り出し)要らないだろ、こんなの。  
老婆 駄目、それ、載ってんだよ、あたし。  
男 どこ。  
老婆 (見ずに)前の列の右から二番目。  
男 ……分かんないよ、小さくて。  
老婆 分かるって、よく見れば。  
男 (数珠)じゃあこれは？  
老婆 ありがたいんだよ。  
男 もしかして、真珠？  
老婆 まさか、安かったし。  
男 何だよ……  
老婆 でもそれ買ってから調子がいいの。ほら……(腕を伸ばして見せる)  
男 胡散臭えなあ……(手袋)ならこれは？  
老婆 可愛いじゃない、ウサギさん。  
男 でも穴開いてるし。(指を入れて見せる)  
老婆 使えるよ、直せば。  
男 くそ……  
老婆 意味あるんだよ、ちゃんと。  
男 そんなこと言ってたら片付かないだろ、ちつとも。  
老婆 いいじゃない、捨てるのはいつでも出来るんだし。  
男 いつでもと言ってるうちはいつまでも、残り続けるガラクタの山。  
老婆 お、短歌だね……だけでもさ(手袋を取り)こんな可愛いく、(数珠を取り)あらたかな、それも捨てえばただの燃えカス。  
男 もう帰るぞ。  
老婆 え、何で？  
男 これじゃ見つかるもんも見つからねえよ。  
老婆 (七五調は崩さず)簡単に諦めるなよまだ早い、無いはずはないきつとどこかに。

男 よく言うよ。  
老婆 まだ母さんの部屋もあるし。  
男 あ、母さんの部屋……  
老婆 あたしも協力するからさ。  
男 当たり前だろ、誰のだと思ってるんだ。(水玉の帽子を見つけ)これはいいだろ。  
老婆 え、それは……  
男 水玉だよ、水玉。こんなの被って歩けるかよ。  
老婆 それ和美ちゃんのでしょ。  
男 え？  
老婆 忘れてったの、来た時に。  
男 ああ……(帽子をコタツの上に置く)  
老婆 ちよつと、しっかりしてよ、お父さん。はい。(帽子を男に渡そうとする)  
男 いや俺に渡されても……  
老婆 持って帰ってよ、ここにあつたつてあれだし。  
男 ……(受け取り、ポケットに仕舞う)  
老婆 まあ、もうそんなの被る歳じゃないか。  
男 ……  
老婆 しばらく会ってないけど、大きくなったでしょ？  
男 そりゃ……  
老婆 今……中学……？  
男 そうそう。

少しの間

老婆 あれ、でも、年賀状じゃランドセル背負ってたような……  
男 え……いつの話だよ。  
老婆 じゃあ中学か……  
男 そう中学……  
老婆 もうそんなになるんだあ……  
男 私立だから金掛かって大変だよ。  
老婆 そんなに？  
男 寄付金一五〇万だよ。  
老婆 一五〇万……  
男 借金して寄付するなんておかしな話だろ。  
老婆 そこまでして収めなきゃなんないの？  
男 いや寄付だから絶対ってことは無いだろうけど、皆さん納めて下さってます……  
老婆 はあー……  
男 払わなかったせいでいじめられでもしたら困るだろ。  
老婆 ……

男 見栄張って私立なんか入れんじやなかったよ……

老婆 それ、出してあげてもいいよ。

男 本気かよ。

老婆 だって必要なんでしょ。

男 そりゃあ、もう……

老婆 だったら(いいよ)……

男 いやあ助かるよ、それは。

老婆 もっと早く言ってくれば良かったのに……マンション買わせといて何でそこで……

男 そうだよな、全く……ホントにありがとな。

老婆 でもそのためには見つけないと……

男 見つけるよ、何としても。

老婆 良かったあ……約束ね。(小指を出す)

男 あ、うん……(指きりの形になる)

老婆 ゆびきりげんまん、嘘ついたら針千本のおます。

男 じゃ母さんの部屋、探してくるね。(立ち上がる)

老婆 え、お茶ぐらい飲んでいきなよ。

男 鉄は熱いうちに打たないと。

老婆 え？

男 さっきの約束、忘れないですよ。

老婆 まあお茶も熱いうちに……

男、行ってしまう。

老婆、けん玉を手に取り、

老婆 (声を潜めて)母さんの部屋にもありませんー……(けん玉の成功如何に関わらず)成功……

老婆、けん玉をコタツに置く。

最中を手に取り、しばし考えた末、食べる。

ポケットから通帳を取りだし、

老婆 一、十、百、千、万、十万、百万……一、十、百、千、万、十万、百万……しかも使われては……うん、いない。よし……(再びポケットに入れる)

少しの間。

老婆 どう、見つかったあ？(また最中を食べる)

男 (声)まだ、これから……

老婆 ま、そう簡単には見つからないか。

男 (声)大丈夫、見つけるよ……

老婆 うん、よろしく。あのさ、そっちに黒い入れ物があるだろ。  
男 (声) どんなの。

老婆 だから黒いの、そんな大きいのじゃなくて。

男 (声) ……ポーチ？

老婆 そう、それ。持ってきてくれる？

その時玄関のチャイム。

老婆 はーい。

老婆、玄関へ向かおうする。

慌てて戻ってくる男。手には黒いポーチ。

男 待って。

老婆 何。

男 誰。

老婆 分かんないよ、チャイムしか聞いてないし。

再びチャイム。

老婆 今行きます。

男 おい。

老婆 何よ、さつきから。

男 はい、これ。(ポーチを渡す)

老婆 あ、ありがとう。

男 ま、ま、座って。(老婆を半ば強引に座らせる)

老婆 どうすんの……？

男 せっかくの親子水入らずなんだぞ、どこぞの馬の骨に邪魔されてたまるかよ。

玄関で「入るよ、おばあちゃん」の声。

咄嗟に台所に隠れる男。

まもなく学生がズカズカと入ってくる。

老婆 おお、いらっしやい。

学生 良かった、無事で……

老婆 え、何で？

学生 電話繋がらないんだもん、心配したよ……

老婆 あら、じゃあやっぱりあの時(男の姿を探す)……？

学生 (部屋を見渡し)うわあ、片づいてんじゃん。

老婆 でしょう？

学生 (座布団の山から自分が座るための座布団を持ってきながら) やつと分かってくれたんだね、片づけの魅力を。来るたびに語ってきた甲斐があったよ。(老婆の傍に座る)  
老婆 息子も手伝ってくれてさ。  
学生 息子? 帰ってきたの?  
老婆 うん。  
学生 良かったじゃん。  
老婆 (台所に男がいることに気づき) ほら、そんなとこ隠れてないで挨拶しなさいよ、人見知りする歳じゃないでしょう。

男、気まずそうに出てきて、

男 どうも……  
学生 こんにちは。  
男 あの、こちらは……?  
老婆 孫、孫。  
学生 嬉しいなあ、そう言ってもらえると。  
老婆 孫だよ、もう。  
男 ……?  
老婆 学生さん。  
男 ああ……  
学生 ぬくむくるむから来ました。  
男 ぬくむくるむ? ……ボランティアか何か……?  
学生 大学公認社会福祉サークルぬくむくるむ。皆でぬくんでくるんで支えていこうって、いい名前でしょ? (老婆を抱く)  
男 ああ……  
老婆 あたし支えられてんの。  
老婆・学生 (顔を見合わせ) ねえ?  
男 ……  
老婆 良かった、賑やかになって。  
男 ハハハツ……  
学生 (電話の方へ向かいながら) お仕事ですか、今日は。  
男 そうそう。  
学生 (電話を見て) あ、やっぱりそうだ……  
老婆 やっぱり?  
学生 抜けてるよ、電話線。  
老婆 あら。  
男 多分探してた時に……  
老婆 そうだね、きつと……  
学生 (がらりと変わり) 何考えてんですか。  
男 何って……

学生 電話線って言ったたら、独居老人のライフラインですよ。そんな自由に出歩けるわけじゃないんですから、人と繋がるチャンスの大半は必然的に電話でしょう。この無機質な機械を見つめ、鳴らないだろうかと心待ちにする姿を想像してみてくださいよ。何と惨めなことか、何と切ないことか。鳴ったと思えば、またあなたが何が欲しいとか何の金を送ってくれとか言ってくるし。けどそれにもささやかな喜びを見出して生きる活力にしてるんです。そのチャンスをあなただけは奪ったんですよ、分かっています？ それに具合悪くなって救急車呼ぶことだってありますよ。けど電話する気力はあっても、電話線挿し直す力はそうそうあるもんじゃないでしょう。(電話線を挿し直す)具合、悪いんですから……

男 分かったよ、もう。

学生 何探してたんだか知りませんが、どうせ大したものじゃないでしょう、

男 いやそれは、

学生 (遮って)うっかり、外してしまうなんて……うっかりじゃ済まされせんよ。

老婆 通帳だよ。

学生 通帳？

老婆 どこやったか忘れちゃって……

学生 あ、それは……

男 大したもんだろ。

学生 威張ることじゃないでしょう、抜いたんだから、あなた。

男 ……

学生 頼みますよ、ホント……

学生、台所へ。

男 何なんだ、あいつ……

老婆 燃えてんだよ。

男 何に。

老婆 ボランテア。

男 ぬくんでえ？ くるんでえ？ 暑苦しいっての。

学生 (声)今夜は芋の煮っ転がしですか。

老婆 そうそう。

男 これもボランテア？

老婆 まあ現状を知るといっつか……

学生 (声)芋の煮っ転がしかあ……

老婆 食べる？

学生 (すかさず)もちろん。

男 味まで知る必要あるのかよ。

老婆 好きなのよ、あの子。お前も食べるよね。(と言って立ち上がる)

学生 (戻ってきて)あ、そのまま。火は点けてきたんで。

老婆 ああ、そう。(座る)

男 早い仕事で。  
学生 ありがとうございます。

男 ……

学生 やはり来たからには、少しはお役に立たないと……

男 食べるんだろ、芋の煮っ転がし。

学生 そこはギブアンドテイクで。

男 そもそも、温めんのはあんたが食うためだろ。

老婆 いいじゃない、そんなの。

学生 美味しかったよ、冷めたままでも。

老婆 食べたの？

学生 ちよつとね。

老婆 温めたらもつと美味しいよ。

学生 楽しみだなあ……お、竹屋の最中。

老婆 食べてよ、どんどん。

学生 やったあ。(手に取る)

老婆 その前に。

学生 あ……せーの。

老婆・学生 (歌う)パリッと軽やか心も弾む、竹屋の最中あ。

学生 ハモったね。

老婆 ホント？

学生 (男に)そう思いませんか？

男 え……んー……

老婆 何だよ、ノリが悪いねえ。

学生 いただきます。(食べる)

老婆 あ、お茶……

学生 やるやる。

男 いいよ、座ってるよ、客人は。

男、お盆を持って、逃げるように台所へ。

学生 良かったじゃん、帰ってきて。

老婆 でも今日のうちには帰るって言うんだよ。

学生 え、今日？

老婆 うん、さつき来たばかりなのに。

男 (声)お茶っぱ、お茶っぱ……

学生 あ、左の棚にあります。それと、急須はまな板の横です。

男 ……

学生 気をつけて下さいよ、古いのと新しいのとありますから……大丈夫かなあ……

老婆 まあ新しいの開けても……

学生 駄目。そうやってて湿気らせたでしよ。

老婆 ああ、そっか……(台所に向かつて)駄目だよ、新しいの開けたら。  
男 丸聞こえだから、そっちの話。

と言いながら男、お茶を持って戻る。お盆の上には湯飲み。

学生 ご苦労様です。  
老婆 (お盆から湯飲みを取って)はい、どうぞ……あっ……(お茶を零す)

学生、台所へ。

呆気にとられ、ただ見ている男。

学生、台拭きを持って戻ってきて、

学生 大丈夫？

老婆 うん、コタツだけ。ごめんね。

学生 気をつけてよー……

学生、濡れたところを拭く。

男、搜索を再開。

学生 え、どこの通帳？

老婆 郵便局。

学生 また失くしたの？

老婆 そうなのよ……

男 この前はズボンの中入ってたよね。

老婆 ああ……

男 見て、ズボン。

老婆 見たよ、最初に。

男 ……

老婆 さすがに同じへまはしないって……

男 もしかして……

男、老婆の部屋へ向かう。

学生 行っちゃったよ。

老婆 戻ってくるさ、そのうち。

老婆、何やら探しだす。

学生 全く、これで何回目？

老婆 いやこれは違うんだけど……

学生 何が違うのさ。

老婆 ん？ これは(靴下だよ)……

学生 どこだ、今度は……(探そうとする)

老婆 いいよ、探さなくて。

学生 どうして。

老婆 どうせすぐ見つかるし。

学生 何で分かるの。

老婆 実はさ……(ズボンから通帳を出し)あるんだよ、ここに。

学生 え、じゃあ……

老婆 見つかったら帰っちゃおうし。

学生 ああ……

老婆 今夜くらいは泊まって欲しくてさ……あ、このことは内緒ね。

学生 正直に言ってみたら？

老婆 何を？

学生 泊まって欲しいって。

老婆 言ったさ。それで首縦に振るなら苦労しないだろ。

学生 そっか……

老婆 ホントはこんなことしたくないんだけど……(ズボンのポケットに通帳を戻す)

学生 大人しく泊まればいいのにね。

老婆 そうだよ、あの頑固め……(床の物を取ろうとした拍子に腰に痛みを覚える)アタタ

……

学生 大丈夫？

老婆 何、ちよつと……

学生 行ってる、病院？

老婆 うん、明日だよ、ちようど……

学生 明日？

老婆 第四週でしょ。

学生 土曜って休みじゃないの、県立？

老婆 あれ、今日って……？

学生 金曜。

老婆 ありや、じゃあ……

学生 今からでも……

老婆 もう受付終わってるし。

学生 うーん……

老婆 大丈夫、来週行くし。

学生 今度は忘れないようにしなよ。

男、ズボンの山を抱えて戻ってくる。

学生 何ですか、それ。

男 見りや分かんذار、ズボン。  
老婆 なるほどね。

男、ズボンの山を床に置き、一つ一つ確認する。  
まもなく電話が鳴る。  
なおこの後のやり取りの途中で救急車が近づいてくる。

老婆 (電話に出る)もしもし……え……ああ……まあ……うん……うん、元気だよ……ちよつと待ってね。(男に)どういうことだろうね。

男 ……

老婆 あたしのこと母さんって。

男 母さん……

学生 マジで？

老婆 あれかな、ニュースでやってた。

学生 あ、オレオレ。

老婆 そうそう。

男 そうだよ、きつと。

老婆 でも腰悪いの知ってたよ。

学生 あれ……

老婆 心配もしてくれまし。

学生 じゃあ本物？

老婆 いるじゃない、ここに。

学生 そうだよなあ……

男 腰悪い年寄りなんて珍しくないって。

老婆 ああ、確かに。

男 早く切つちまえよ、そんなの。

老婆 でもお金の話してなかつたよ。

学生 これから話すつもりなんじゃ……

老婆 (電話口の相手に)もしもし、今息子に代わります。

男 いいよ、代わらなくて。

老婆 お前が出れば、話が早いでしょ。

学生 そうですよ、ガツンと言ってください。

男 「息子はここにいますから」って言えばいいことだろ。

老婆 もう代わるって言っちゃつたし、はい。(受話器を男に渡す)

男 ……(意を決して)何だよ、今度は。テレビ？ パソコン？ アイパット？ あいにくな、今無いんだよ、通帳、母さんが無くしちゃつて。だから振り込めねえよ、だつて無いんだから。自分で買えよ、たまには。はい、じゃあ。(切る)

老婆 やっぱり金送れって？

男 先回りして言つてやつたんだよ。

学生 随分具体的な要求でしたね……でも今度は……？

男 常習犯の臭いがしたからよ。

学生 あ、なるほど……詳しいですねえ。

男 はあ……

学生 オレオレかあ、初めてだよ、遭遇したの。

老婆 おお、良かったね。

男 (自分に言い聞かせ、歌う)オレーオレーオレー……

学生 いやあ、見直しましたよ。

男 ……

学生 話を聞いちゃうから駄目なんです……他のメンバーにも教えてあげなくちゃ。

男 止めるよ、そんなの。

老婆 良かったあ、お前がいて。

救急車が家の近くで停まる。

老婆 おっ近いんじゃない、これは。

老婆、学生、縁側から救急車の行方を見つめる。

学生 伊勢崎さんちだよ。

老婆 (男に)あら、タカちゃんち。

男 ……

老婆 お前しよつちゅう泣かせてたじゃない。

男 ああ、あの泣き虫か……

老婆 奥さんか、旦那さんか……ひよつとして、

学生 行く？

老婆 もちろん。(男に)どうする？

男 残るよ、俺は。

老婆 薄情だねえ、タカちゃんかもしれないよ。

男 ー、でも……

学生 あ、担架持って入ってった。

老婆 おお、行こう、行こう。

学生、老婆を連れて玄関へ。

男、ズボンを床に置き、一つ一つ確認する。

しばらくして電話が鳴る。

慌てて電話線を抜く男。

男、逃げ出すため玄関に向かおうとした時、学生が戻ってくる。

学生 どうしたんです？

男 いや、気になって……

学生 お父さんです。

救急車が出発する。

学生 ありやもう駄目ですね。

男 いいのかよ、そんなこと言って。

学生 硬直してるんですよ、ロボットみたいに腕曲げたまま。

男 ふうん……

学生 頭ですねえ、あれは……いやうちのじいちゃん、あ、祖父もそうだったもので。

男 母さんは？

学生 西田さんと話しています。そのうち来るでしょう。(台所へ)

男 ……

学生 (声)ちよつと、何で止めといてくれないんですか。

男 あ、焦げてる？

学生 (声)底のほうは全滅、中腹も下半分は切らないと……

男 でもあんたが火に掛けたんだろ。

学生 (声)そんなの、家に残ったんだから、あなたは。

男 ……

学生 (声)息子来たら火事になったなんて、シャレにもなりませんよ。

男 ……

学生、芋の煮つ転がしを器に山盛りにして持ってきて、

学生 いつもの悪い癖で作りすぎてたのが救いでした。

男 食べるのかよ。

学生 食べます？ 何なら箸持ってきますけど。

男 いいよ、俺は。

学生 まだ気にしてるんですか。

男 え？

学生 大丈夫ですよ、それだけ痩せれば。全然メタボじゃないです。

男 ああ……

学生 やつと納得しました。

男 何に？

学生 よく言われてたんです、お婆ちゃんに、あなたに似てるって。でも写真見ると思いつきりメタボだし、はあ勘弁してくれよって思ってたんですけど……(男の顔をまじまじと見て)確かに似てますね、目の辺りとか。

男 そんなジロジロ見るなよ。

学生 あ、すいません……いただきますーす(食べる)……んー美味しい……

男、黒いポーチを手に取り、開ける。出てきたのはペン型の注射器。

男 (注射器を見て)……

学生 大変ですよね。

男 え？

学生 毎日でしょう、それ。

男 ああ……(注射器をポーチに戻す)

学生 耐えられないなあ、食べたいものも食べられないなんて……

男 ……

学生 おまけに油断すると……(半分になった芋を見せる)こうでしょう？

男 え……

学生 谷川さんってご存知ですか、あの自治会長やってた。

男 まあ名前くらいは……

学生 あその旦那さんが……(欠けてはいるがまだ原型を留めている芋を見せ)始めはこうだったんですけど、この前ついに……(また半分の芋)こうですよ。

男 ……あの、それは……何？

学生 両足切断。

男 ひえっ……

学生 まあすぐについてわけじゃないらしいですけど(食べる)……(ポーチの中にある健康手帳を見て)うわ、二百越えてんじゃない、血糖値。

男 ……？

学生 昨日……あ、一昨日も……ヤバイっすよ、二百越えは。お婆ちゃん気をつけないと……

男、搜索を開始。

学生、コタツのけん玉を手に取り、

学生 (けん玉を示し)上手かったそうですね。

男 ああ……

学生 もしもし亀よって、三十分続いたって聞きましたよ。

男 子供ん時な。

学生 やってみて下さいよ。

男 嫌だよ。

学生 覚えてるでしょう、身体が。

男 それどころじゃねえだろ。見て分かんないのか。

男、探し続ける。

少しの間。

学生 今日中に帰るって聞いたんですけど。

男 ああ。

学生 泊まってあげたらいいじゃないですか。  
男 はあ？  
学生 明日休みでしょう。  
男 ……  
学生 土曜日じゃないですか。  
男 ……いいよな、土曜が休みで。  
学生 え……？  
男 ……  
学生 じゃあ有休取って……  
男 有休……(笑う)  
学生 いいじゃないですか、一日くらい。  
男 あんたには関係ないだろ。  
学生 ありますよ、一応孫だし。  
男 孫って……  
学生 聞いたでしよ、あなたも。  
男 年寄りの夕飯漁って孫気取りか。  
学生 漁るって、それあんまりじゃないですか。  
男 (山盛りの芋を示し)じゃあ何だ、この山は。  
学生 食べていいって……  
男 食うか、こんなに。  
学生 まだありますよ、大丈夫。  
男 そういう問題じゃねえよ、これって孫か、これってボランティアのやることか。  
学生 あなたに言われたくないですよ、親の資産食い散らかしてるあなたに。  
男 ……  
学生 断る権利なんかあるんですか、散々物買って貰つといて。こういう時ぐらい親孝行しようって思うのが普通でしょう？  
男 親孝行は他の時に、  
学生 (遮って)カーデイガンですか。  
男 え？  
学生 母の日にカーデイガン買ってあげたって？  
男 そうそう。ちゃんと節目、節目は、  
学生 何年前の節目ですか。裾はよれよれ、ボタンは一つ欠けてるし。  
男 ……  
学生 それでも自慢してくるんですよ、僕に。もう可哀想で見てもらえませんよ……そもそも物で済ますってどうなんです？  
男 何を偉そうに。  
学生 たった一晩泊まるだけなのに何で……  
男 だから仕事だって。  
学生 僕だったら休みますよ、授業。  
男 授業と一緒にするな。

学生 僕にとつては仕事です。  
男 休んだら解雇されんだよ、こっちは。  
学生 え、そんなヤバいんですか。  
男 いや……分かんねえだろ、今どき、一流企業だってバンバン首切ってたし。  
学生 何だ。  
男 何だって、  
学生 そんなこと言ったらキリ無いでしょう。  
男 いいよな、親のスネかじってる学生は、気楽で。  
学生 気楽じゃないですよ、ちつとも。内定一つしかないし。  
男 いいだろ、一つでも貰えりゃ。  
学生 居酒屋チェーンですよ、過労死でニュースになった。  
男 え……？  
学生 そりゃあ僕だって内心ビビってますけど……でもネガティブに考えたってしょうがないでしょう。  
男 てかいいのか、こんなところで油売ってて。  
学生 あなたが来ないから来てんですよ。  
男 俺のせいだよ。  
学生 そうですよ、あなたさえ来れば安心して就活出来るのに……見捨てておけないでしょう、放つとくとゴミ屋敷になるの目に見えてんだし。  
男 ……  
学生 年に一度あるかないかの機会じゃないですか。  
男 事情があるんだよ、色々。  
学生 何事情って？  
男 そんなのあんたに喋るようなことじゃねえだろ。  
学生 どこまで甘えるんですか。親孝行したい時には親はもういないんですよ。  
男 分かりもしないくせに口出すんじゃないよ。  
学生 何を、お茶っぱの場所も分らないくせに。  
男 ……  
学生 あなたそれでも息子ですか。  
男 だから探してんだろ、通帳。ホントは今すぐにも帰らなきゃいけないのに……  
学生 ……  
男 そんなの僕でも出来ますよ、いやきつと僕の方が得意ですよ、いつも探してるし。  
男 じゃあ手伝えよ、少しは。こういうのがボランティアアってもんだろ。  
学生 とんでもない。  
男 何だと。  
学生 見つけたら帰るでしょ。  
男 しょうがないだろ。  
学生 待ってたんですよ、ずっと。  
男 いいだろ、帰ってきたんだから。  
学生 満足するなよ、そこで。

男 満足って……

学生 帰ってきたって言ったって、あなたのはこんなんでしょ？（けん玉の玉を中皿に乗せ、落とす）そんなんじゃないやなくて、（玉を剣に刺し）こういうのが帰るって言うんですよ。

（コタツの上に立てる）

男 うるさいなあ。

学生 うるさいとは何ですか。

男 分かったから、もう。

学生 え、じゃあ（泊まっていくんですね）……？

男 いいよ、一人で探すし。

学生 おばあちゃん必死なんですよ、ウソまでついて……

男 ウソ？

学生 あっ……何で分からないかなあ……

男 何だよウソって。

学生 いやウソはついてませんけど、

男 言っただろ今、ウソまでついてって。

学生 それくらい泊まって欲しいんですよ。

男 どういうウソだよ。

学生 いいでしょ、そんなこと。

男 良くねえよ……

学生 あなたホントに息子ですか。

男 だからそうだって、

学生 とてもそうは思えないですよ。

男 失礼な奴だな……

学生 だって帰らなきゃいけないにしたって、悪いなあとか、申し訳ないなあとかあるでしょ、普通。でもそういうの全然感じられないし。

男 ……そんなの表に出したら期待させるだろ、また来てくれるんじゃないかって。

学生 ……ああ、なるほど……

男 ……

学生 確かにそういう考え方もありますね。

男 だろ？

学生 ……

男 考えてんだぞ、考えてないようにしてても……

少しの間。

学生 でも……

男 何だよ。

学生 おばあちゃん、聞いてくるんですよ、いつ来るんだって。そんなの、僕が分かるわけじゃないじゃないですか。それでも聞くんですよ、僕に。いつも、いつも……

男 ……

学生 初めはお盆じゃないのって言ってましたけど、あなたついにお盆も来なかったって言うし……正月も、ゴールデンウィークも……もうどうしようかと思って……  
男 何が言いたいんだよ。  
学生 今度はいつ来るんです？  
男 ……  
学生 次聞かれたら、何て答えたらいいんですか。  
男 ……知るかよ……  
学生 ……

間。

男は搜索に没頭し、学生は芋の煮つ転がしを食べる。

学生 (芋の煮つ転がしを平らげ)美味しかったあ……  
男 ……  
学生 ご馳走様です。ついでに持ってきますね、これも。

学生、芋の煮つ転がしが入っていた器とマグカップ、湯のみを乗せたお盆を持って、台所へ。

学生 (戻ってきて)今日も最高に美味しかったとお伝えください。  
男 帰るのか。  
学生 ええ。  
男 そうか……  
学生 すいませんね、余計なことばっか言っちゃって。  
男 ……  
学生 でもたまには帰ってきてあげてくださいよ。  
男 ……  
学生 それじゃ、失礼します。

学生、去る。

男、コタツの上に立てられたけん玉を突く。

何度目かで倒れ、老婆が座っていた座布団に転がり落ちるけん玉。

倒れた瞬間、びっくりする男。

男、ズボンの山を持って老婆の部屋へ。

老婆の「よいしょ、こらしよ」と言う声。

まもなく老婆が大きな紙袋を持って、縁側に現れる。

老婆 ちよつとお、よろしく。

男、戻ってくる。

老婆 はい、これ。(男に紙袋を渡す)

男 何？

老婆 西田さんがくれたの、いつものリンゴ。お前が好きだって覚えててくれてさ、いっぱいくれたよ。

男 しゃべったのかよ。

老婆 そうそう。

男 おい。

老婆 後で食べようね。ごめん、台所置いてきて。(去る)

男 入らないの？

老婆 (声)元気の玄関……(玄関へ)

男、紙袋の中のリンゴを見ている。

老婆、入ってくる。さつきとは打って変わって浮かない様子。

老婆、座布団に落ちたけん玉を拾い、座る。

少しの間。

老婆 帰ったんだね。

男 ああ……

男、紙袋を持って台所へ向かう。

老婆 ……出てく時さ、玄関に靴が三つ並んで、いや正確にはあの子は脱ぎ散らかしてただけど。

男 ……

老婆 それ見て、何だか懐かしくって……

男 ……

老婆 ちゃんと並んでるのは父さんと母さんで、脱ぎ散らかしてるのはお前ね……三つが二つになって、二つが一つになって……長いんだよ、廊下が……

男 (声)泣き落としかよ。

老婆 別にそんなんじゃないよ。

男 (声)どうだかな。

老婆 何その言い方。

男、戻ってきて、

男 聞いたぞ。

老婆 え？

男 ウソついてんだろ。

老婆 何のこと？

男 とぼけんなよ。言ってたぞ、あいつが。  
老婆 ……

男 どんなウソだよ。

老婆 あ、聞いてないんだ、それは…

男 だから今…

老婆 良かったあ…

男 良かったじゃねえよ、帰るぞ、もう。

老婆 待ってよ、言ったら帰らない？

男 そんなの聞いてみないと、

老婆 言ったら泊まってくれる？

男 泊まるわけねえだろ。

老婆 えー、じゃあ言わない。

男 おい…

老婆 泊まったら、教えてあげる。

男 何で泊まらなきゃいけないんだよ。

玄関で物音がする。

男 あっ…

老婆 どうしたの。

男 誰？

老婆 そんな驚くことないでしょ。

老婆、玄関へ。

男、台所に隠れる。

老婆、新聞を持って戻ってくる。

老婆 夕刊。

男 (出てきて)夕刊…

老婆 大丈夫？

男 ああ…

老婆 しっかりしてちょうだいよ。

男 ……

男、搜索を再開。

老婆、老眼鏡を掛けた後、ポーチを見て、

老婆 あれ、やったつけ？

男 え？

老婆 注射。

男 知らねえよ……  
老婆 多分やってないよね……

この後の会話は次の作業をしながらなされる。  
老婆、ポーチから血糖値の計測器と穿刺器、ガーゼを取り出す。  
指をガーゼで丁寧に拭いてから、穿刺器に当てる。  
バチンという鈍い音がした後、少量の出血が見られる。  
計測器のセンサーを血に触れさせて、ピーツという音がしたらコタツの上に置く。  
男は捜索を続ける。

老婆 何、まだ探すの。

男 当たり前だろ……

老婆 ……

男 もはや母さんだけの問題じゃないんだぞ。

老婆 どういうこと？

男 寄付金、出してくれるんだろ。

老婆 寄付金？

男 おい、まさか……

老婆 ああ、和美の。

男 そう、寄付金、忘れちゃいけないよ、寄付金だよ。孫のためにもさ、ばあちゃん、ここは頑張らないと。

老婆 頑張るのかあ……

男 そうだよ。

老婆 明日になれば思い出すと思うんだよ。だからさ、今夜は泊まっていきなよ。

男 明日、明日、また明日って、いつまでも引き止めるつもりだろ。

老婆 そんな風に言わなくてもいいじゃないか。

その時、計測器のピツという音が鳴る。

老婆 おお、やっぱり。

男 (見ようとしな)……

老婆 (計測器を示し)二〇〇超えたよ、二三二。

男 二三二……

老婆 やっぱ最中の力は大きいね。

男 食べたの？

老婆 お前だろ、勧めたの。

男 足大丈夫か。

老婆 何で？

男 いや……

老婆、ポーチから注射器と注射針を取り出す。  
注射器の蓋を外し、注射針をつけ、目盛りを合わせる。  
男は搜索に戻る。

老婆 (老眼鏡を頭に上げ) 何。いいよ、見てても。

男 見たくないよ、そんなの。

老婆 これさ、シャープペンシルみたいじゃない？

男 (チラリと見て) ……まあ……

老婆 でしょ？ あたし聞いちゃったよ、先生に。こんなので大丈夫なんですかって…  
…ま、それにしちや高すぎるけど……これ一本で寿司食べられるよ、寿司。前なら  
チラシ寿司ってとこだったけど、今なんてもう……トロでもウニでもどーんとい  
だあ……さて……

老婆、ガーゼで注射する腹部を消毒してから、注射器のメモリーを調整し、  
注射する。コタツの中でやっているため、実際には見えない。

男、見ないようにして搜索を続ける。

老婆、それを見て、

老婆 (わざと痛そうに) うっ……

男、ビクリとする。

それを見て笑う老婆。

男 何だよ……

老婆 よしと(ポーチに器具をしまう)……眼鏡取ってくれる？ その辺にあるでしょ。

男 (老婆の頭にある老眼鏡を見て) してんじやねえかよ。

老婆 ああ、そうだ、そうだ。(老眼鏡を掛け、新聞を開く)

男 無いよね、誰か来るとか……？

老婆 これから？

男 そうそう。

老婆 ……そんなの、お前だって突然来ただろ。

男 ……

老婆 あ、今日何日？

男 ……二十四日かな……

老婆 じゃあ来るね、そろそろ。

男 誰。

老婆 郁子。

男 ……

老婆 覚えてる？ あの、高山のおじさんとこの。

男 何となくは……  
老婆 まあ歳も離れてるしね。  
男 高山のおじさんってことは……  
老婆 いとこでしょ。  
男 ああ、はいはい。  
老婆 まあおじさんもよく来てたけど……  
男 あの、そろそろって……  
老婆 え？  
男 そろそろ、来るんだろ。  
老婆 二四日だし。  
男 あ、二十四日……  
老婆 会いたかった？  
男 いや。  
老婆 だよね。  
男 嫌なんだ、母さんも。  
老婆 だって金借りに来るんだよ。  
男 あの人もあ……いくら貸してんの？  
老婆 あれ……？  
男 おい、忘れるなよ。  
老婆 倍にして返すって言ったのは覚えてるけど。  
男 怪しいよ、それ。  
老婆 そうかなあ。  
男 少しは返してきたの。  
老婆 (最中を示し)これはせつせと持ってくるけどねえ。  
男 最中で誤魔化されんなよ。  
老婆 誤魔化されるわけないでしょ、あたし食えないし。  
男 あ、そうか。  
老婆 あの子、竹屋と同級生でしょ？  
男 だから最中？  
老婆 そんなお人よしじゃないでしょ、あれは。  
男 ……  
老婆 借りてんだよ、あそこからも。  
男 買って誤魔化してんのか。  
老婆 そうそう。  
男 ……  
老婆 言ったんだけどね、他のにしろって。  
男 そしたら？  
老婆 今度は煎餅だよ。佐々木煎餅とは昔結婚寸前まで……  
男 関係ねえだろ、そんなの。  
老婆 でも煎餅も血糖値上がるんだな。

男 ……

老婆 それ言ったたら、今度は羽毛布団を格安で譲るとか言い出して。

男 おいおい……

老婆 格安って言っても結構するんだよ。

男 買ったの？

老婆 二組。

男 いくら。

老婆 三十万。

男 何やってんだよ。

老婆 だって最中も煎餅も食べられないし。

男 何で金貸してる人間がこれ以上金払わなきゃならないんだよ。

老婆 それはそうだけど……

男 そんなの要らないから早く返せって言えばいいだろ。ホント酷いなあ……

老婆 まあ大丈夫。

男 何が大丈夫だ、幾ら貸したか、もう覚えてないんだろ。

老婆 借用书があるよ

男 どこにあんの？

老婆 ……

男 ほら。そのうち、金貸したことすら忘れるぞ。

老婆 ……

男 そうやって物で誤魔化して、待ってんだよ、母さんが忘れるの。

老婆 考えすぎだよ。

男 いや、そうだよきつと。まったく何て奴だ……これ、戻してくるね。

男、最中の皿を持って台所へ。

老婆 もういいの？

男 (声) 食えるか、誤魔化しの最中なんて。

老婆 最中に罪は無いだろ。食べてよ、余ってんだから……

男 (声) 突っ返してやればいいんだよ、こんなの。全く、何て奴だ。

老婆、けん玉をいじりだす。

不意に訪れる静寂。

老婆 でもいいんだよ、郁子でも来てくれれば。

男 ……

老婆 だって来なかつたら独りでしょ。

老婆、けん玉をコタツの上に立て、新聞を読みだす。

男、戻ってくる。

けん玉を見て一瞬たじろぐが、黙って搜索を再開。

少しの間。

老婆、何気なく新聞を手に取る。

老婆 ……よく読むんだよ、新聞。

男 ……

老婆 聞いている？

男 聞いているよ、新聞読むんだろ。

老婆 ただ読むんじゃなくて、よく読むの。まずおくやみ、スポーツ、政治、株……それから経済、芸能、テレビ欄……地方ニュース、投書の広場……文化芸能、環境科学……全部よ。

男 へえ。

老婆 だいたい朝ごはんの片付けして、朝刊読み始めて、読み終わる頃にはもうお昼だ。

お昼食べて、散歩して、昼寝して、血糖値計って、注射して、夕刊読んで。読み終わったら夕飯食べて、ちよっとテレビ観て、九時になったら寝る……この繰り返しだよ。どう？

男 どうって？

老婆 新聞と過ごす毎日。

男 俺読まないし。

老婆 新聞？

男 うん。

老婆 だから酷いんだ、物忘れ。

男 人のこと言えるかよ。

老婆 そっかあ……(笑う)

少しの間

老婆 読みなさいよ、新聞くらい。

男 あ、読んでるよ、競馬新聞。

老婆 何、お前競馬やってるの。

男 母さん、そういうの嫌いだったけ。

老婆 そんなことないよ。

男 そうか、興味あるか。

老婆 うん、あたし、株やってるし。

男 株？

老婆 新聞で株の欄見てたら欲しくなっちゃって。

男 それで、どう。

老婆 ……？

男 儲かってんの。

老婆 ……いや。

男 そうか……どこの株？

老婆 NTT。多分どっかにあるよ。

男 テキトーだなあ。

老婆 お前の方はどうなの。

男 儲かることもあるよ。

老婆 ほう、大したもんだ。

男 ……鉄板だったんだけど、あの馬。

老婆 え、負けたの。

男 自信、あったんだけどなあ。

老婆 幾ら掛けたの。

男 (指を八本立て)これくらいかな。

老婆 八万か。

男 いや、八十万。

老婆 ええ？

男 娘の学資保険だよ。

老婆 おい、それはまずいでしょ。

男 大丈夫なはずだったんだよ、あれとってりゃ、寄付金払えたんだ。

老婆 ……

男 でも大丈夫じゃなかった。そうだよ。おかげで同じ屋根の下に住む他人さ。

老婆 他人？

男 家帰るとテーブルにカップの焼きそばが置いてあるんだよ。

老婆、男を抱きしめる。

老婆 (抱きしめたまま)苦勞してんだねえ。

男 ちよつと、頭洗ってないだろ、フケだらけだぞ。

老婆 気にしないで。

男 気になるだろ……くせえなあ、風呂入ってないだろ。

老婆 入ったよ、三日前に。

男 ……

老婆 もう競馬は止めなよ、あたしも株、止めるからさ。(さらに強く抱きしめる)

男 分かった、分かったから。

男、老婆の手を振りほどく。

勢い余って、床に倒れる老婆。

男 あ……ごめん。大丈夫？

老婆 ……ああ。

男 ……リンゴ、食べよっか。

老婆 うん。

男 じゃあ、(台所へ向かおうとする)  
老婆 いいよ、座ってて。

老婆、台所へ。  
男、新聞を読む。

老婆 (声、嬉しそうに) 食べたんだ、あの子。  
男 美味しかったって。  
老婆 (声) そりゃ良かった……あれ、焦げてるね。  
男 そうそう、火つけっぱなしだったから。  
老婆 よくやるよ、あたしも。

少しの間

老婆、お盆に芋の煮っ転がしとリンゴを乗せて運んでくる。  
老婆、素手で芋を掴み、男の口の中に放り込む。

男 あうっ……  
老婆 どう？  
男 ……うん……  
老婆 でしょ？ 帰って来るとこんなのが待ってるんだよお……  
男 ……  
老婆 ふふふ……

老婆、リンゴを剥く。  
男、新聞を読む。  
少しの間。

男 (新聞を読みながら) 四五万だって。  
老婆 何が。  
男 株だよ、NTTの。  
老婆 ……あ。  
男 どうしたの、いきなり。  
老婆 思い出したよ。  
男 え、ホントに。  
老婆 うん、株に使ったんだよ。  
男 使った？  
老婆 五二〇万ね。  
男 ああ、第一勧銀……  
老婆 そうそう。  
男 五二〇万もしたの？

老婆 一株じゃないよ、もちろん……五株くらいだったかな。  
男 それにしたって、俺より損してるじゃないか。

老婆 だから止めるって。

男 別に責めてるわけじゃないよ。

老婆 いいよ、もう。

男 でもどつかにあるんだろ。

老婆 お前にあげるよ、見つかったら。

男 え、いいの。

老婆 ああ。

男 じゃあ株券も探さないとな。

老婆 そうなると今日中ってのは厳しいね。はい。(剥いたリンゴを渡す)

男 またそんなこと言って。(食べる)あっ……(歯が痛い)

老婆 虫歯？

男 ……

老婆 行きなよ、歯医者。

男 平気、平気……ん……(やはり痛い)

老婆 駄目だよ、強がったって……もしかして怖いの？

男 ……

老婆 もう子供じゃないんだから……

男 分かったもんじゃないやねえだろ……

老婆 え……？

男 いくら取られんだか……

老婆 何、そこまで金に困ってんの？

男、黙って搜索を再開。

老婆、男が探すのをしばし見ている。

老婆 ごめんね……

男 何だよ……

老婆 いや悪いなって……

男 そう思うなら思い出そうとしろよ、少しは……

老婆 うーん……

少しの間。

老婆 片付けるよ、あたし……

老婆、床に散らかってるものを次々とゴミ袋に入れていく。

男 いいのかよ……

老婆 この方が探しやすいだろ……これもいいや。

老婆、捨てるのを拒んだ物も入れていく。

男 それ駄目だって……

老婆 いいの、いいの……

男 ……

老婆 見つけたっ。

男 えっ……

老婆 はい。(靴下を掲げる)

男 ……

老婆 (靴下を男に投げ渡し)脱いでこっち寄越して。(ゴミ袋)入れるから。

黙って従う男。

少しの間。

老婆 あのさ……

男 ん？ ……

老婆 芋も少なくなっちゃったし、何か作ろうと思うんだけど……

男 ……

老婆 何食べたい……？

男 ……卵焼き……

老婆 え……

男 見つかんなかったらな……

老婆 ……美味しい卵焼き、作ってあげるね。

男 うん……

間。

老婆 ねえ……

男 ……

老婆 休もうよ。

男 今始めたばかりだろ。

老婆 何言ってるんの、お前ずっと探してるよ。

男 そんなしよっちゅう休んでたら、帰れなくなるだろ。

老婆 いいじゃん。

男 あ、もしかしてそれが狙いか。

老婆 バレた？

男 その手には乗らないぞ。

老婆 乗ってよー。

男 ……  
老婆 ちよつとでいいからさ、座ってしゃべろうよ、リンゴもあることだし。  
男 ……ちよつとだけな……  
老婆 やったあ……

老婆、座布団を直したり、コタツを台拭きで拭くなど、二人で座ってしゃべる態勢作りをする。

老婆 ちよつと待ってねえ……  
男 何やってんの？  
老婆 セッティングだよ、対話のための。  
男 大げさだなあ……  
老婆 落ち着いて話せるようにさ……  
男 腰悪いんだろ、無理すんなよ。  
老婆 (歌う)だいじょうぶ、だいじょうぶ……

ズボンのポケットから通帳が落ちるが、老婆は気づいていない。

老婆 (コタツを見て)さて、と……あ、お茶、お茶。

老婆、台所へ。  
男、コタツに入る。  
まもなく通帳に気づき、拾う。

老婆 (声)あ、ストーブ。  
男 ストーブ？  
老婆 (声)寒いでしょ、東京の人には。  
男 別に……  
老婆 (声)そう……まあ、いいよ、点けても。結構寒いし、日落ちると。  
男 ……(通帳を見ている)  
老婆 (声)……あれ、古いの何処置いた？  
男 ん？  
老婆 (声)開けよつか、新しいの。こういう時だし。  
男 ……  
老婆 (声)いいよね、別に。  
男 好きにしたら……(通帳を新聞の下に隠す)

少しの間。

老婆 あら、無いや……

男 ……だから探してんだろ。

老婆 卵だよ。

男 卵？

老婆 うん、一個しか。

男 ……

老婆 どうしよつか……いっぱい食べたいよね？

男 ……買ってこようか？（また通帳を手に取る）

老婆 ホント？

男 やるよ、それくらい。

老婆 ありがとう。

男 俺が食うんだし……

老婆 まあそつか……

男 働かざる者食うべからず……（と言ってポケットに通帳を入れながら立ち上がる）

老婆 働いてくれてるじゃない、十分……

男 じゃあ……

老婆 え、もう行くの？

男 行ってきまあす。

男、足早に去る。

老婆、戻ってきながら、

老婆 場所分かる？ 川村マート。

しかし返事が無い。

ガラス戸から外を見て、

老婆 行ってらっしゃい……

老婆戻ってくる。

ふと、通帳が入っているはずのポケットに手を掛ける。

当然の事ながら、無い。

辺りを見渡す。

間。

コタツの上にあるけん玉を手に取り、

老婆 ……もしもし……もしもし……もしもし……もしもし……もしもし……

老婆、けん玉をする。

繰り返す。何度も。